

# 様相主義 (イントロダクション)

小関 健太郎 (慶應義塾大学)

(初出) 2021-09-17 · 第 2 回 存在論・形而上学 WS

CC-BY-NC 4.0

<https://github.com/omws/materials/tree/master/03-modalism>

## 様相主義の概要

### 様相的真理と可能世界理論

■可能世界理論における様相的真理の説明. 可能世界理論は可能性や必然性のような様相概念に、直観的な説得力があり、形式的にも有用な説明 (e.g., 様相論理の可能世界意味論 (Kripke 意味論)) を与える。つまり、最も単純な形では次のようなものである:

- $A$  が可能的に真 ( $\Diamond A$ )  $\iff$  ある可能世界において  $A$  が真
- $A$  が必然的に真 ( $\Box A$ )  $\iff$  すべての可能世界において  $A$  が真

■問題提起. 可能世界理論が様相的真理を説明する唯一可能な理論なのか?

いくつかのモチベーションの候補:

- 可能世界の形而上学の問題 (様相実在論, 代替主義, 虚構主義, ...) を避けることができる
- 可能世界理論よりも、あるいは可能世界理論とは別の形で、直観的な説得力があり、形式的にも有用な説明が得られる可能性がある
  - 少なくとも哲学史的には、可能世界による様相概念の説明が常に主流であったわけでも、全面的に受け入れられてきたわけでもない

## 様相主義とその周辺

■様相主義の整理. 様相概念に関するいくつかの主張として、さしあたり次のような主張を挙げることができる:

- (P1) 様相概念は非様相的な概念に還元可能である
- (P2) 様相概念は別の様相的な概念に還元可能である
- (P3) 様相概念は還元不可能である

可能世界理論は通常 (P1) を肯定する見解のひとつとみなされる (cf., e.g., Sider 2021). これに対して, (P1) を否定して (P3) を認める見解が様相主義 (modalism) と呼ばれる (本質に関する様相主義 (本質概念は様相概

念によって説明されるという見方)は別の概念である)。つまり、最も一般的な形では、様相的真理は何らかの X によって字義通り次のように説明される:

- A が可能的に真 ( $\Diamond A$ )  $\iff$  X が可能的
- A が必然的に真 ( $\Box A$ )  $\iff$  X が必然的

また、より不定的な意味で様相原始主義 (modal primitivism) という用語が用いられる場合もある。Wang (2021) は (P1) を否定する見解のうち、(P2) を認める見解を様相原始主義と呼んでいる。

実際のところ、(P1) – (P3) の差は「様相的な概念」をどう理解するかにも依存する。まず (P1) と (P2) については、Sider が (様相的命題に関して) 論じているように、様相概念を還元することができるような別の概念があるのであれば、そのような概念こそがまさに様相的な概念であるということも可能なのであり、Sider はむしろ還元の結果が認容可能 (acceptable) かどうかが問題であるとしている (Sider 2021, 185)。また、様相概念を別の様相概念に還元することを還元として認めるかどうかによって、(P2) と (P3) の差は曖昧である。

その上で、(P1) や (P2) を認める見解としては、様相概念についての本質による説明、傾向性 (disposition) や力能 (power, potentiality) といった特定のカテゴリーの性質による説明などが挙げられる (cf. Borghini 2016, sec. 3; Warmke 2016)。

■可能世界理論から様相主義への翻訳。様相主義はさらに、次の主張を含む見解である、あるいはそのようにみなされる場合がある:

- (WT) 可能世界への言及を含む言明は、様相主義の語彙のみを用いた言明に翻訳可能である

現代的な様相主義の嚆矢とみなされる Fine (1977) は (WT) の形式的な実現に焦点を当てている。しかしながら、(WT) の手続きは自明なものではなく、(むしろ相当程度に複雑であり、) 完全に実現可能かどうかについては論争がある。他方で、様相主義が同時に可能世界理論を全面的に認める理由はないという意味では、(WT) へのコミットメントは様相主義にとって必須のものではない (Shalkowski 2006)。

## 様相主義の形而上学

### ■Forbes の理論

- Forbes (1989) の理論は真正の意味での様相主義 (であるとともに、おそらく最初の体系的な様相主義の現代的擁護) の理論であり、様相そのものをそれ以上還元できない形而上学的に原始的な [=プリミティブな] ものとみなしている
- 原始的な様相の担い手として、Forbes は**事態** (states of affairs) を挙げている

### ■事態とは?

- ここでは事態を、それが**成り立ったり** (obtain)、**成り立たなかったりする**ものであるということによって大まかに特徴づける

- (例) 事態の例として、〈東京タワーが赤色であること〉や〈土星が輪を持つこと〉を考えることができる (以下では〈…〉で事態を表す). 東京タワーや土星それ自体は事態ではないという点で区別される (東京タワーや土星が成り立ったり成り立たなかったりはしない)
- 事態は他にも様々な仕方で特徴づけられ、それぞれの間で共通性や差異がある (個別者と性質の複合, 可能世界の部分, …)

## 可能的事態と存在

### 背景

#### ■Forbes の理論の課題.

- Forbes (1989) で素描されている理論には、否定的事態や可能的事態に関する問題がある (小関 2021; cf. Richard 1994, 140f.)

#### ■可能の成立の問題. Forbes の理論は (原子命題に関して) 次の主張を受け入れているように思われる:

- (1) 命題 A が真 iff 事態 〈A ということ〉が成り立っている iff 〈A ということ〉が存在する
- (2) 命題 A が偽 iff 〈A ということ〉が否定的に成り立っている iff 〈A ということ〉が存在しない

Forbes の理論によれば、事態が可能性の担い手であるということは、事態が「可能的な」成立の様態 (mode of obtaining) で成立しているということになる (Forbes 1989, 139). したがって少なくとも次のように言うことができる:

- (3) 命題 A が可能的に真 iff 〈A ということ〉が可能的に成り立っている

しかしながらここで、(3) において 〈A ということ〉の存在のあり方がどのようなものが問題になる

- もし事態が存在しないなら、何によって (可能性あるいは可能的成立という) 否定的成立以上のことがもたらされているのか明らかではない
- もし事態が存在するなら、少なくとも (2) は満たさないので偽であることはできず、(1) から、ある命題が可能的に真であることが単に真であることを伴うことになる
- それ以外であるなら、それ以外の説明が必要になる

## 可能的事態の存在論

### ■理論的系譜.

- Forbes は上記の見解に関してライナッハの議論を参照しており、ライナッハの議論はマイノングとフッサールのそれぞれの議論に基づいている (Reinach 1911; cf. Textor 2020, sec. 2.2)
- Forbes の理論の問題点は、フッサール-ライナッハやマイノングの形而上学的枠組みではさしあたり回避されている (小関 2021)

■**ライナッハの理論**. ラйнаッハの理論では、存在する事態がそれ自体に肯定性や否定性のような規定性を持ち、可能性についても同様であると考えられる

- (1′) 命題 A が真 iff 事態〈A ということ〉が肯定性を持ち存在する
- (2′) 命題 A が偽 iff 事態〈A ということ〉が否定性を持ち存在する
- (3′) 命題 A が可能的に真 iff 事態〈A ということ〉が肯定的な可能性を持ち存在する

■**マイノングの理論**. マイノングの理論では、可能的成立に対応する可能的存在として「存在未確定性」が位置づけられる (さらに、冗長かどうかという点を措けば、ライナッハの理論と同様の説明も実質的に認めている)

- (1″) 命題 A が真 iff 事態〈A ということ〉が存在対象である
- (2″) 命題 A が偽 iff 事態〈A ということ〉が非存在対象である
- (3″) 命題 A が可能的に真 iff 事態〈A ということ〉が存在未確定 (seinsunbestimmt) な対象である

## 文献表

- Borghini, Andrea. 2016. *A Critical Introduction to the Metaphysics of Modality*. Bloomsbury. [第 3 章が様相主義に充てられている (おすすめ)].
- Fine, Kit. 1977. “Postscript.” In *Worlds, Times and Selves*, by Arthur Prior. Duckworth. Reprinted in Kit Fine, *Modality and Tense* (2005).
- Forbes, Graeme. 1989. *Languages of Possibility*. Basil Blackwell.
- Reinach, Adolf. 1911. “Zur Theorie des negativen Urteils.” In *Gesammelte Schriften* (1921). Max Niemeyer.
- Richard, Mark. 1994. “Review of Graeme Forbes, ‘Languages of Possibility’ .” *The Philosophical Review* 1: 139 – 42.
- Shalkowski, Scott A. 2006. “Modality, Philosophy and Metaphysics of.” *Encyclopedia of Philosophy*. Thomson Gale. [様相主義について積極的な立場から後半で紙幅が割かれている (おすすめ). 次のページでも閲覧可能: <https://www.encyclopedia.com/humanities/encyclopedias-almanacs-transcripts-and-maps/modality-philosophy-and-metaphysics>].
- . 2020. “Modalism.” Edited by Otávio Bueno and Shalkowski, Scott A. *The Routledge Handbook of Modality*. Routledge.
- Sider, Theodore. 2021. “Reductive Theories of Modality.” In *The Oxford Handbook of Metaphysics*, edited by Michael J. Loux and Dean W. Zimmerman, 180 – 208. Oxford University Press.
- Textor, Mark. 2020. “States of Affairs.” Edited by Edward N. Zalta. *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*. Metaphysics Research Lab, Stanford University. <https://plato.stanford.edu/archives/sum2020/entries/states-of-affairs/>.
- Wang, Jennifer. 2021. “The epistemological objection to modal primitivism.” *Synthese* 198 (Suppl 8): S1887 – 98.

- Warmke, Craig. 2016. “Modal Semantics without Worlds.” *Philosophy Compass* 11: 702 – 15.
- 小関健太郎. 2021. “マイノングの事態論における可能性と存在.” *哲学の門* 3: 44 – 55.